

くるいがありませんでした。このころは、鉄分による磁石のくるいから方向を誤るあやまことがありました。

一か月あまりたったある日、豊助は、自分の計算によると、そろそろ開通するかいつうころだろうと考えて、洞門の工事現場に入っていくきました。豊助の姿を見て、人夫たちの仕事ぶりも熱をおびてきました。一人として休もうとする者はいません。泥どろによごれた顔は汗あせにまみれてまっ黒です。

そのとき、豊助の耳に変な物音が聞こ

